

有識者意見

横浜国立大学
大学院 環境情報研究院 教授

佐土原 聡 氏



本報告書は、全体を通して多岐にわたるさまざまな環境配慮の取組を数字でしっかりおさえ、表現されているという印象を受けました。

特集では、「低炭素社会」と「生物多様性」の2つを取り上げ、UR 都市機構全体としての取組として認識しているところが、非常に先駆的で評価できる点だと思います。

昨年の、有識者意見でご指摘のあった次の3点に対する措置(対応) 状況を確認いたしました。

❶ UR 都市機構が実施する多角的な取組について

里山の活動やライフスタイルの活動など、プロジェクトとしての環境配慮の取組が、記事として読者に見える形でわかりやすく紹介されている点が改善がみられた。

❷ 環境配慮が評価されることへの視点

LED 照明などの新しい取組については、住まいづくりの良さを数値で具体的に示されている。今後は、お住まいの方の感想なども掲載すると、新技術の普及開発につながるのでぜひ進めてほしい。

❸ 長期的な取組について

「住み続ける」という点で、高齢化や子育て支援の取組のみならず、特集で「低炭素社会」と「生物多様性」を柱としている点で要件を備えている。

以上の指摘事項の対応を評価するとともに、次の具体的な課題に対する取組をさらに推進されることを期待いたします。

生物多様性の定量的なデータの蓄積

低炭素社会に向けた取組については、定量的なデータも増えつつありますが、生物多様性についてはまだ漠然としている部分が多く、データが不足しているのが現状です。UR 都市機構は、多数のフィールドや取組の実績があるので、現場における計画手法の検討や効果の計測を

するなど、生物多様性の取組を続けて定量的なデータを蓄積し、環境報告書などで取り上げることで社会に還元していただけるとよいと考えます。

取組の体系的整理、評価を含めた情報発信

UR 都市機構には都心から郊外、古いものから新しいものまでたくさんのストックがあります。

それらを立地や住まい手などの条件により分類し、環境配慮の取組を体系的に整理すると、多様な状況に対応した環境配慮の取組がわかりやすくなると思います。

さらに、それぞれの取組について、計画や手法だけではなく、よかった点、悪かった点がわかるような評価・結果まで含めた情報を発信していただくと、社会的な有用性の発揮や継続的な波及につながると思います。

「住み続けたいまちづくり」への提案

これからは、人口減少していく時代になりますが、とりわけ郊外の住宅団地では住民も行政も大変な危機意識を持っています。どう対応するか難しい課題ですが、UR 都市機構が取組を通じて、今後も継続してチャレンジし、社会に提案していくことを期待します。生物多様性や低炭素社会に対する UR 都市機構の取組が、地域やお住まいの方にどうつながり、将来どういう生活になるのかという「生活像」を住まい手側の視点で提案できれば、モデルとして、そのノウハウを社会に継承していくことができると考えます。

UR 都市機構のみなさんには、まちをプロデュースする専門家集団としてぜひ社会に貢献していただけることを期待しています。